

平成29年度 展示圃試験結果

試験目的: ①H29年度時点の助成金の満額である10万5千円を確保できる施肥体系の検討。

試験概要

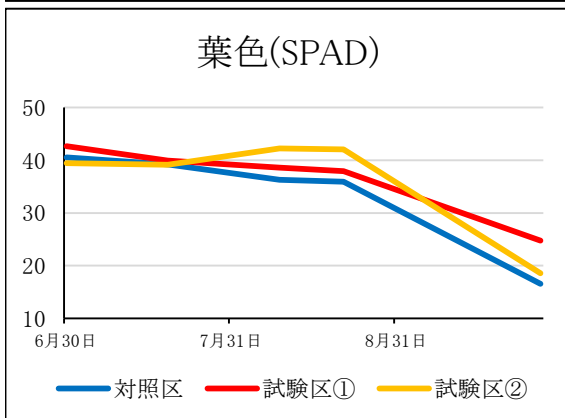
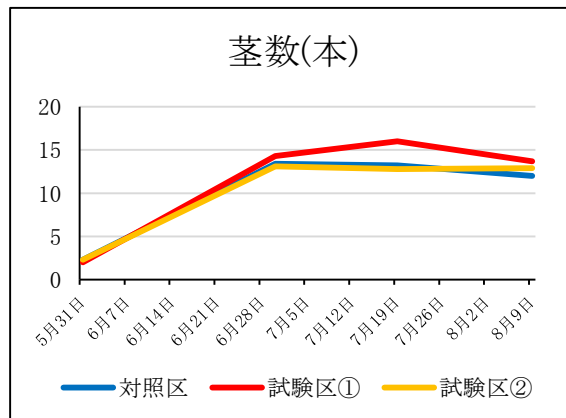
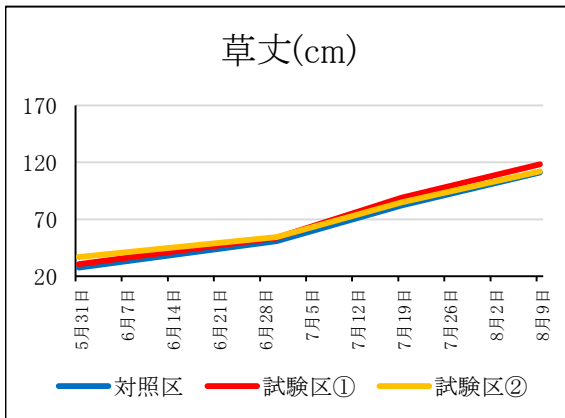
試験場所住所	岩手県花巻市
対象作物	水稲(いわいだわら)
使用面積	各30a程度
移植日	5月15日
植付株数/坪	60株/坪

施肥体系

	施肥日	資材名	成分 (N-P-K-Mg)	施肥量 (kg/10a)	成分量(kg/10a)				
					N	P	K	Mg	
対照区	元肥	5月15日	他社化成肥料	22-10-10	18	4.0	1.8	1.8	-
	追肥	6月27日	尿素	N46	9	4.0	-	-	-
	合計					8.0	1.8	1.8	0.0
試験区①	元肥	5月15日	水稲一発077-1号	30-7-7	40	12.0	2.8	2.8	-
	合計					12.0	2.8	2.8	0.0
試験区②	元肥	5月15日	水稲一発077-1号	30-7-7	35	10.5	2.5	2.5	-
	追肥	7月25日	高度トモエ化成550	15-5-10	10	1.5	0.5	1.0	-
	合計					12.0	3.0	3.5	0.0

水稲一発077-1号…全窒素30%(内速効性:15%、内被覆尿素由来窒素:15%)
他社化成肥料…高度化成肥料

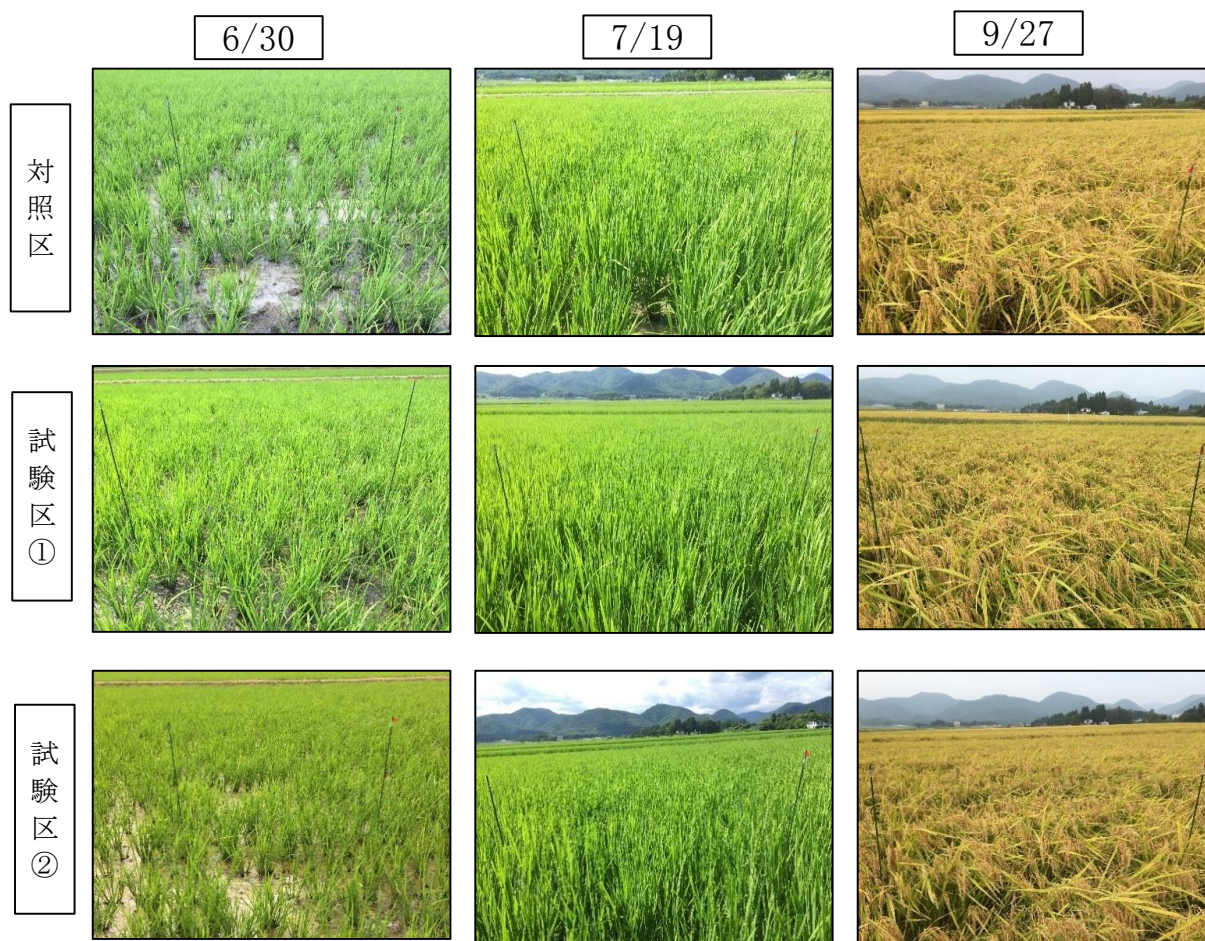
中間生育の推移



- ・草丈は生育期間を通して、両試験区が高く推移した。
- ・茎数は対照区と試験区②はほぼ同様に推移した。試験区①は対照区と比較して多く推移した。坪刈り時の茎数(穂数)は両試験区とも対照区と比較して多かった。
- ・対照区と試験区①では生育期間を通して試験区①の葉色が高かった。対照区と試験区②の葉色を比較すると追肥の高度トモエ化成550を施用(7/25)以降は試験区②の葉色が高く、最終的な葉色も高かった。

定点調査写真

○定点調査は、周囲に欠株のない生育中庸な連続10株を測定した。



7/19時点で幼穂は十分に確認でき、出穂期は7月末頃～8月上旬であったと予想される。

◇収量調査結果



各区60株を刈り取った写真は
両試験区の株の方が
ボリュームが多い印象。

収量調査結果

調査項目	1株当り 穂数	坪当り 株数	収量構成要素				登熟 玄米重	未登熟 玄米重	飼料用米 玄米重	収量比
			m ² 当り 穂数	1穂平均 着粒数	登熟 歩合	精玄米 千粒重				
区別	本	株	本	粒	%	g	kg/10a	kg/10a	kg/10a	%
対照区	12.6	54.1	204.7	159.1	59.5	25.6	497	110	607	100
試験区①	15.6	54.1	253.6	177.7	45.0	27.2	552	191	743	122
試験区②	13.1	54.1	212.3	185.7	52.6	28.3	587	164	751	124

※各区、欠株を考慮し、坪当たりの株数を実測値より1割減にて計算した。

未登熟玄米重も同様に1割減にて計算し、登熟玄米重と未登熟玄米重の合計を飼料用米収量とした。

※m²当りの着粒数…対照区:32,572粒 試験区①:45,072粒 試験区②:39,420粒

試験区①では対照区と比較して136kg/10a(22%)、試験区②では145kg/10a(24%)増収した。

◇試験区①(水稻一発077-1号)

水稻一発077-1号を施用した試験区①では、対照区と比較して136kg/10a(22%)の増収となった。

収量構成要素では、対照区と比較し1株当りの穂数と、1穂着粒数が多く、m²当りの着粒数が増加したことが増収の大きな要因となった。

◇試験区②(水稻一発077-1号+高度トモエ化成550号)

水稻一発077-1号と追肥で高度トモエ化成550を施用した試験区②では、

対照区と比較して144kg/10a(24%)の増収となった。

収量構成要素では、1穂着粒数と千粒重が対照区を大きく上回ったことが増収の大きな要因となった。

最終的な収量は全ての区のなかで最も多収となった。

◇試験結果まとめ

◇試験圃場地域の平均反収は534kg/10aである。

◇試験区①、試験区②の収量はそれぞれ、試験区①743kg、試験区②751kg/10aであった。

両試験区とも基準反収を大きく上回り(基準反収+150kg/10a以上)、

H29年度の助成金の満額である10万5千円の確保が期待できる結果となった。

◇本試験結果より、いわいだわら(飼料米)の栽培に水稻一発077-1号と高度トモエ化成550の施用が有効であることが確認できた。